

吉利支丹懺悔録の方言：特に九州方言に就いて

土井，忠生

<https://doi.org/10.15017/10590>

出版情報：九大國文學. 3, pp.40-56, 1932-02-10. 九大國文學研究會
バージョン：
権利関係：

吉利支丹懺悔錄の方言

——特に九州方言に就いて——

土 井 忠 生

ドミニコ派のデイエゴ・コリヤード(Diego Collado)編「懺悔錄」(一六三二年寛永九年羅馬にて刊行)の紹介は、早
く新村先生が本文の一部を抄出翻字して解題を添へられたものがあり、南蠻記、南蠻廣記の中に收められてゐる。近
くは吉野作造博士及び松崎實氏の「切支丹懺悔錄」(改造第十卷)、長沼賢海教授の南蠻文集、姉崎正治博士の切支丹迫
害史中の人物事蹟に殆ど全文に亘つての翻字解説が發表せられてゐて、何人も容易に見得るやうになつた事は甚だ好
都合である。懺悔錄が慶長元和頃の風俗研究資料として價値多い事はよく知られてゐる所であつて、その方面からこ
の書を讀まうとする者にはこれら三種の翻字本で略その用を達するであらう。然し語學資料として取扱はうとする者
は、これら翻字本のみを以て満足すべきでない。以上三種の國字本は夫々多大な努力が拂はれてゐるやうであるが、
而も尙翻字上最も必要な語學上の用意と工夫が充分でなかつたかの憾がある。故に先づ國字本に據つて大體を知つた
後にも更に原本に就いて調査し確かめるやうに心掛けねばならない。

懺悔錄に信徒が告白を終つて聽罪師に教誨を乞うた次に、左の問答が記してある。

(師の問) 仰せある如く、最も科とがの數かずも深さも、いかい事なれども、心底こんていよりそれを一々後悔し再び犯すまいと思

ひ切つて、皆一つも残さずあらはしあつた、の？

(信徒の答) なか／＼、なにが、どうす(Doug)の御代(おやまり)(御名代の意)に過を隠しまらせうぞ？(五八頁。以下引用文は原本の頁数を示す)

これ *Salvator mundi* (一五九八年慶長三年日本耶穌會學林出版の國字本) に教へてゐる所であつて、「如何なるもるたる科(あにまを終りなき苦しみに落す程の科也同書附註)」にてもあれ、恥しさを恐れかにひかれて隠す事あるべからず。其故はこんへそる(聽罪師) こんひさん(懺悔)を聞給ふ時はせずきりしとの御名代なれば、こんへそるに科を隠す事は直にせずきりしとを忤り奉らんとすることにならず」とも説いてある。すべての虚偽虚飾を去り、サルヴァートル・ムンディの明治二年新刻本「とがのぞき規則」に特に「無益の言葉を用ずして」と注意してある如く、言葉を飾り文章を練るよりも、平素の言葉葉を以て心に浮ぶがまゝを告白すべきものである。どうすやきりしとに直接向つてゐる心持で懺悔するのであるから、その言葉が敬語に満ちた他所行きのあらたまつたものとなるのは、已むを得なかつたであらうけれども、亦著しく耳立たぬ程度で郷談即ち方言の混入する事も免れなかつたであらう。コリヤードの懺悔録は信徒の口述その儘の完全な筆記でないにしても、懺悔の言葉を全然變改するやうな事もなかつたであらうから、吉利支丹の多かつた近畿から九州にかけての言葉がその中に見出されるであらうと推測せられるのも敢て無理ではない。然るに吉町義雄氏は「九州方言の特異性」(二)(本誌第二號所載)中に於て、懺悔録中に九州方言が存すると観る諸説を廣く検討し、終に

懺悔録などに於ては立派な中央語なる事は今更此處で繰返す必要はあるまいと思ふ。其の他の音聲、語彙に關し

ても同様である。

と断定せられた。果して懺悔録の中には九州方言の要素を全く見出し得ないのであらうか。吉町氏の下された結論は絶対に動かないものであらうか。長崎方言とか豊後方言とかを明示する事は勿論出来ないけれども、少くとも九州方言ではないかと推定出来るものが含まれてゐるやうに思ふ。以下その具體的な實例に就いて述べよう。

卷頭第一の「いつ(又は)いつ頃(頃)こんひさん(Confession原語に拘泥せず當時の通用語形を示す。以下倣之)を申しあつたか?」との間に對する答の一つに曰く

われが四五六年さきより吉利支丹でありあつたれども、御存じの如く、ばあでれ(Padre)様のおん逼塞によつて、連々(絶えず、常にの意)こんひさんを申しあげうと、力の及び才覺致いたれども、遂にそのてうびがござらいで今迄こんひさんを申しあげまらせなんでござる(四頁、當時の「せ」はすべてseと發音せられてゐたが便宜「せ」で寫す)(イ)

右告白中の「てうび」の語は他に尙三ヶ所見えてゐる。

今ばあでれ様のおん逼塞の盛りでござれば、どみんご(Domingo日曜日)祝日(原本*iunabi*とある)に御みち(missa)を拜むてうびがござらいで、是非に及ばぬ事なれども、二三度は叶ひながら、たゞゆるかせて拜みまらせんでござつた。(三番のまだめんとに就いて、二八頁)ロ

某、女房を持ちながら近づきも持ちまらした。その手かけも夫のある者でおぢやる。さうござれば、一様の妨があつて、望のまゝにそれを科に墮ちまらせいで、たゞてうび次第に致しまらした。數はえ覺えねども、一月には二三度もあり、一度もあり、無い事もござる。(中略)兎角仕合せに相よりまらした。(六番の御掟に就いて、三

六頁)ハ)

その内又廿年、一年、二月、二年の妾もござつた。何度宛とも覺えまらせぬ。たゞてうびに任せました。(六番の御掟に就いて四四頁)(ニ)

右の「てうび」は如何なる語であるか。吉野博士、松崎氏は(イ)の附註に、

チヨウビは對譯羅甸文には *o. o. o. o.* とあり、機會の意味なれば姑く丁日を宛つ。

と説明してゐられる。對譯拉丁文によれば、(ハ)(ニ)は(イ)と同じく、(ロ)は *opportunitas* となつてゐて、すべて同義である。さうして、この「てうび」は原本では四つとも *chibi* と寫されてゐる。(イ)(ロ)は *ch* に續くために *i* の上に鼻音化の記號が加へてある)。もは耶蘇會士等の用ゐた長音記號と同一であつて、合音を示してゐる事は、同じくコリヤードの編纂に係る日本文典(懺悔録と同年に羅馬にて刊行、但し序言の日附は文典が一六三一年八月三〇日、懺悔録が一六三二年七月八日である)の序言に *chibi* (佛法)はアクセントを示し *i* の誤植であらうか)を例に擧げて *o. o.* と同音價であると註してゐる(四頁)のに依つても明かである。「佛法」の字音は「ぶつぽふ」であるが、一五九八年慶長三年耶蘇會學林版「落葉集」に「ぶつぽう」としてあり、勿論ブツポーの發音であつた。合音の *o* に對する開音はコリヤードに於ても亦 *o* 又は *o* で示されてゐる(版本日本文典四頁)。故に *chibi* は「ちやうび」でなく、「ちようび」又は「てうび」(「てふび」)でなければならぬ。吉野博士松崎氏が「チヨウビ」と標出して「丁日」を宛てられたに就いては、開合の上から「丁」の字音を考へてみる必要がある。

一體に從來の翻字本はこの開合の別に對してさほど嚴正でなかつたやうである。一例を示すと、「そうぞう」(一二

(頁)は總別そうべつと同じく全部全體などの意味の語であるが、吉野博士松崎氏のは正しく「總々そうざく」とあり、姉崎博士のは、意味のみを傳へて「總々そうざく」とし、長沼教授に至つては更に「創造さうぞう」となつてゐて意味まで誤解せられてゐる。「丁目」も吉野博士松崎氏が附註でテヨウビの發音として考定してゐられるにも係らず、本文では(イ)も(ロ)も丁目ちやうびとなつてゐる。(ハ)(ニ)を含む「六番の御掟に就いて」は全文削除せられてゐる。丁の字音は、丁子、丁香皮、沈丁香など、用ゐられる時は、「ちやう」であつた(易林本節用集 落葉集)。即ち開音の *chō* である(慶長八年長崎耶穌會學林版日葡辭書)。然るに偶數の意を示す時には合音「てう」に發音せられてゐたのである。日葡辭書に *chō* の語を擧げ、先づ偶數の意であることを説き、賽の目の偶數が出た意の「てうがおりた」を出し、又奇數の意の「半」をも説明し「てうはん」の熟語を加へてゐる。*chōfan* の熟語は復別に標出し、丁か半かの懸事をする意の「てうはんにかけてする」といふ成語も收めてある。これら偶數の意の「丁」はすべて *chō* と寫されてゐるので合音であつた事が確かである。和訓栞「ちようはん」の條に指摘してある如く丁半に重半てうはんの字を宛てるのもその證となし得る。更に又、調半てうはんが正しくて丁半又は長半は借字だとする小山田與清の説(松屋筆記卷三十八の廿)が當つてゐるならば愈以て合音でなければならぬ。「丁目」の語は日葡辭書にも登録せられてゐないが、他の例から推して當然合音に發音せられてゐたとしてよい。古くから重日と書かれた例もあるやうである(和訓栞所引百練抄)。故に姉崎博士が、丁目に(イ)では「てうび」、(ロ)では「ちようび」と傍訓せられたのが正しい。(ハ)は丁目のみで傍訓なく、(ニ)はその部分の本文が削除せられてゐる。かく意義の相違に伴つて開合も亦異なる例に就いては耶穌會士ジョアン・ロドリゲスもその日本文典に説いてゐる。前にコリヤードから引用した佛法の「法」の如きもその一例であつて、妙法めうぽう、王法おうぽう、心法しんぽう、

佛法、諸法など教法等の意の時は合音である。然し法度の意では、例法、法式、理を破る法はあれども法を破る理はなしなど、開音に發音する（長崎版文典一七八丁裏）。以上の宛字及び傍訓は落葉集によつたのであるが、易林本節用集にもこの別は明かである。即ち保の部に收めてある法語、法談、法門、法驗、法流、法樂は合音であり、波の部に收めてある法様、法例、法式、任法は開音であつて、ロドリゲスの所説と合致する。王法も節用集にはワウボウとなつてゐる。

かくして發音上から言へば、*chôbi* に丁日を宛てる事に難はない。然るに一方日葡辭書にもこの語が收められてゐる。それを見ると、先づその字義を解して「*Totonoye sonayuru*（とよのへそなふる）」とある。易林本節用集にある調備がこれに當るであらう。長沼教授がその懺悔録翻字本に於て、調備を宛てられたのは此處に據られたのであらうか。懺悔録中に「たゞ御勘氣を遁れうするための調儀（*chôgi*）でありあつたれども」（二〇頁）とある調儀（策略工夫の意）の調と同一漢字であり、その字音假名遣は節用集の示す如く「てう」である。長沼教授が「調儀カ」と傍註しながら「ちやうぎ」と書かれたのは精しくない。前掲（ハ）の例に「てうび」とせられたのを採るべきである。

さてかの日葡辭書に調備を註して、「食物を調理し又は入れませること」と一般に通用する原義を擧げ、次に比喻的の用法として「下の地方では好都合好機會の（*boa conjunção, oportunidade*）等の意に解する」と説いてある。即ち日葡辭書に據れば、好機會等の意味の *chôbi* は調備なる字音語であり、而も下の地方即ち九州地方に於ける特殊な用法であつたのである。

是に於て我々は丁日と調備との中何れに従ふべきかを考へて見なければならぬ。好機會の意に用ゐられる語とし

ては、丁日の轉義と見る方が比較的容易に解釋出来るやうでもある。然し「丁の日」が「丁日」と重箱讀の複合語となつた形がその頃行はれてゐたかどうかと不明である。百練抄の「重日」は何れに讀むべきかわからない。博く文献に徴した上でないと斷言は出来ないけれども、慶長前後の辭書類には見えてゐない。尤も文献上の證左がなくても、ある地方には既に存してゐて意義の變化も行はれたのであると想像出来ないでもないが、そこまで想像を逞しうするよりも、その當時の相當に信用してよい説明にさほどの無理がなかつたならば、その說に従ふ方が無難であらう。次に述べるやうに、「しあはせ」が「てうび」と同義に用ゐられてゐるのに照し合せて、機會よりも都合便宜といふ點に重きを置いて考へると、調備の轉義と解することも敢て困難ではなからう。それ故に今は日葡辭書に従つて丁日よりも調備を採ることにする。それは兎もあれ角もあれ、こゝに重要なのはその調備が方言であるといふ事である。

懺悔錄に收められた告白は大體慶長元和の間の採録に係るものと推定せられるので、その中に用ゐられてゐる言葉の方言であるか否かを定めるのに、耶蘇會に屬する伴天連が日本人の協力を得て慶長の初め數年間を費し長崎の地で編纂した日葡辭書の説明を根據とする事は、西部方言に關する限り、多くは誤らないであらう。然らば告白文中の「てうび」も九州方言の調備であると言つて差支なからう。方言の調備に對する一般通用語は何であるかと言ふに、前掲(ハ)の文中に見える「仕合」の語が即ちそれである。この外にも次の如き用例がある。

(ハ) 望が起る時はそのまゝ仕合せをうかどうてほしいまゝにつとめ(六番の御掟に就いて、四二頁) (ホ)

日本氣質にっぽんかたぎにまか盃さかづきの辭儀じぎは平生へいぜいの事なれば酒さけ(又は)御酒ごしゆをたぶる仕合せまじあひが繁さかうござつた。(五番に就いて、五四頁) (ヘ)

何れもその對譯拉丁文では *occasio* が用ゐてある。日葡辭書にもこの語を收め、かゝる拉丁語から出てゐる葡語で説

明してある。懺悔録と殆ど同時にコリヤードの手に成り同年に羅馬で印行せられた拉日對譯辭書（序言の日附は一六三二年八月一日。ヅチカン圖書館藏コリヤード自筆初稿本の西班牙語日本語對譯辭書には最初に一六三二年と記入してある）にも *Opportunias et occasio* と並べ擧げ「仕合せ」の日本語を、宛てゝゐる。又、一五九五年文祿四年天草耶蘇會學林版拉葡日對譯辭書にも *Occasio* に「仕合せ、便り」を第一義とし、*Opportunias* には「よき時分、幸ひ、よき仕合せ、ついで」と譯してあるやうである（一八七〇年ヅティヂヤン師羅馬復刻の拉日辭典に據つたので天草本がこの通りであるとは斷言し難い）。兎に角「仕合せ」等が一般通用の標準語であつて、「調備」が九州方言であることは認めてよからう。さうして九州に於ても「調備」と共に「仕合せ」も併用せられてゐた事は、(ハ)の例により又(ニ)と(ホ)とが同一告白中の言葉であるのによつても知られる。

吉町氏の指摘せられたやうに、「さかいに」の如き近畿方言と考へられるものもあるが、その外にも方言ではないかと疑問を懐かしめるやうな語彙がある。例へば、

その上又、患ひの難儀な時分に、その腹中に祟つたものをば、いつもく、ださるゝまいと願を立てたれども、振舞に人よりやらせられたれば、横柄な者と思はれまいために、遂に取つてたべまらした。(二番の御掟に對しての科の

事、二六頁)

右文中の横柄は原本に *vof.oi* とのみで長音符が加へてない。當時はやはり「わうへい」即ち *völei* であつた事は日葡辭書によつても明かであるが、こゝに長音符のないのは單なる誤植に過ぎないかも知れない。かゝる誤植は少くない。次に「くださるゝ」は「ある人に敬意を拂ひながら自分自身に就いて話す時に飲食する事を意味する」と日葡辭

書に説明してある通りである。さうして「下さるゝ」の第一義は身分の高い者から低い者に與へる事であるが、「やる」が又こゝでは與へる意に用ゐてゐる。かゝる用例は他にもある。

其の後眞の主・誰と能う知りながら、いまだその金をやりまらせぬ。兎角あらばやらうとの定めはたび／＼でござつた。やるまいとも一度も二度も存じまらした。さりながらも早渡しまらせず。(七番のまだめんとに就いて、四六

頁)

かく「やる」を物と與へる意に用ゐるのは地方的なものであつたやうである。慶長八年出版の日葡辭書にはこの語の第一義を命令する事であるとしてゐるが、翌慶長九年刊行の同辭書補遺の部では更に「車を遣る」といふ言ひ方に就いて説明し、次にある物を與へるといふ意味のある事を註した所に特に拉丁語で *Alieubi* (ある所に於て) と、附記してある。古くから存し、今日も廣く行はれてゐる意味であるが、當時にあつては地方的に限られてゐたでもあらうか。疑を存して置く。精密な研究を盡したならば、この類の語は尙見出されるであらう。

方向を示す助詞が畿内九州關東で相違してゐた事は、「京へ筑紫に關東(又は坂東)さ」といふ諺となつて最もよく知られてゐた所である。即ち京都附近では「へ」といひ、九州では「に」といひ、關東では「さ」を用ゐてゐたのである。ロドリゲスの説明によれば、都では「へ、の方へ」、下即ち九州では「に、の様に、の如く、さま、さな、の方へ、の方へ」を用ゐた「長崎版日本文典一〇丁表、一七〇丁表には「さま」を「さまへ」としてある)。尤も「都のやうに上る、關東の如く下る」等といふのは粗野な低級な言ひ方であつた(同文典一二三丁裏)。

コリヤードも亦この點に關して簡単に説明してゐる。彼の日本文典の初稿本たる西班牙文寫本(大英博物館藏)には、

先づ「あちへ參らう」を擧げ、次に「都へ（又は）都を指いて（又は）へ向けてのぼる」、或は、「都のかた（又は）方へ（のぼる）」といふ例を示し、更に九州方言に就いて「ある人は『都のやうに（又は）都の如くのぼる』と言ふ。然しそれは悪い言ひ方である」と述べてある（一三二頁）。拉丁文に改められた版本（五八頁）では、九州方言に「都さな」の用例を加へ、ロ氏の記事を確實ならしめてゐるのを多とすべきであるが、「都のより」とあるのは「都のやうに」の誤りと見るべきであらう。又西文寫本の標準語的言ひ方「都を指いて、都へ向けて」が、版本で「都に指いて參ろ」「都に向けて參ろ」となつてゐるのは如何したものか。或は刊行に際して拉丁文に書き變へるのに九州方言に索かれて却て誤を廣く傳へるやうになつたのでもあらうか。何れにしても九州では「に」が最も多く用ゐられたのである。

懺悔録を見るに、殆どすべてが「へ」である。例へば、その奉行へ、文なりとも使をやつてなりとも（一八頁）
どうすに對しても悪口を吐いてゐらるゝ所へ、われが付き合つて（二〇頁）

瘦てゐる所へ、人がそろ／＼と近づいて（六番の御掟に就いて、四〇頁）

人の内の物が物を賣りに身が所へ、來たれば（七番のまだめんとに就いて、四六頁）

大事なる客衆二三人身が方へ、おぢやつて（五番に就いて、五四頁）

今はやる吉利支丹の障礙（迫害の意）に就いて身が邊へ、奉行が來て（慈悲の所作に對して五六頁）

又、第一誠の中の「ぎりしたんになりてより神ほとけを拜みたりや否やと糺し拜みたるにをひては幾度と其數をも申べし」(耶蘇會學林版サルヴァートル・ムンデイ)との條項に當る告白の一つに次のものが出てゐる。

或時も讓りの公事(相續に關する訴訟事)に就いてぜんちよ(gentle異教徒)の所に久しう居りまらしたれば、その

宿の亭主と隣りより、吉利支丹と見知られまいために、それを伴致してたび／＼ぜんちよの御堂（佛教の寺院）へ。行つて、ぜんちよなみに十念もなしまらした。又再々ぜんちよ神佛の事を褒美せらるゝ時、我も低頭して、言葉でもなか／＼御尤もぢやと申して、深い科を犯しまらした。これは何度でござら（らうか）と覺えまらせねども、大略二三十度程、せめて二十度餘りであつつろ（らうか）と思ひふくみまらした。（二〇頁）

この告白に對する聽罪師の言葉に曰く、

又ぜんちよ寺に行つて十念したことの上に、あの所へ戻りあらう時は、眞の吉利支丹でござる。あのぜんちよより見知らるゝために、それ寺へ行かれうすお伴せず、又神佛の事を褒美せられう時も、諸はぬのみならず、却て吉利支丹の眞のどうすのおん教へばかり一勝れた宗でござると、そのぜんちよの前で申し觸らしあらいでならぬ。（五八

―六〇頁、五九頁は對譯拉丁文）

信徒の告白には勿論「へ」を用ひ、聽罪師の教誨にも大體「へ」を用ひながら、たゞ一つ「に」を混じてゐる。日本人ならぬ伴天連の言葉の中であるから、九州の信徒が九州方言を口にする場合と同一視出来ないけれども、兎に角、九州方言の片影が窺はれる。都の言葉を標準語として學習しながらも、九州方言を耳にする機會の多い伴天連が不用意に方言を混用した事もあつた事實を物語るものであるとは考へられないであらうか。或は前述の如く拉丁文日本文典の「へ」の條に見られるやうな誤りもあるから、これも編者たるコリヤード自身に關した事であるかも知れない。

尙、「へ」と「に」との疑はしい例を擧げると、

傾城になつて女郎町へまかりいて（ie）、我が身をば好む者に賣物として（六番の御掟に就いて四二頁）

御みさを拜みに參つて、初めから末までその所にまかりいつた(二三)れども、それに念をかけまらせなんだによつて、拜まぬと同じ事でござると思ひまらす。(三番のまだめんんに就いて、二八頁)

これらはその拉丁語譯によつて見るも、「女郎町へまかり行つて」「その所にまかりゐたれども」の意である。従つてその「へ」に「に」の用法は標準語と異ならない。「行つて」を「して」、「ゐた」を「いつた」といふ事もあつたかも知れないが、誤記誤植の類ではなからうか。動詞によつては「へ」に「何れをも取つてゐた。例へば「われらに下されい」とも「われらへ下されい」とも言ひ、「そなたには頼むまい」とも「そなたへは頼むまい」とも言ふ事は標準語の中にあつたのである(ロドリゲス長崎版日本文典一五二二表)。懺悔録ではかゝる場合に「に」が用ゐられてゐる。

その金の三分一知人にやつて(二番の御掟に對しての科の事、二六頁)

貧人になりともか御みさを行はせてなりともか施して(七番のまだめんんに就いて、四六頁)

貧人に施いて(同前、四八頁)

又「しんへるの(Inferno 地獄)に墮ちしで叶はぬ」(一四頁)は「りんぼ(limbo 古聖所)と申す所へ下らせられ」(二二頁)「ぐるうりや(gloria 天國の榮光)へござらぬ先に」(一四頁)と相似た言ひ方であるが、「科に墮つる」などともいふ動詞「墮つる」のために「に」を取つてゐるのである。必ずしも方言的な相違であるとは言へない。

前引文例中の「十念」は從來の翻字本で「誦念」又は「呪念」(長沼教授、一ヶ所には誦念が死てゝある)となつてゐるものであるが、原本には jūnen (二〇頁) jānen (五八頁) 長音記號が加へてある。阿彌陀の名號を十度唱へる十念の語と解すべく、十念は落葉集にも日葡辭書にも出てゐる。かくoやuの長短を誤つた翻字の例は少くない。短

音を長音とせられてゐる例を挙げると、近邊衆（一八頁）きりしたん衆（一八、三八、五六頁）代官衆（二〇頁）等の衆は「しゆ」であるべきにも係らず、大抵「しゆう」「しう」と傍訓してある。符號に關しては誤記誤植が多く常にそのまゝを取る事も危険ではあるが、原本に對しては忠實に而も當時の發音に照して綿密に吟味する事を怠つてはならない。そして他方辭書類に徴して見て彼此相違したものや、或は懺悔録中でも前後一樣でないものの中には、時に方言であるものが含まれてゐないとも限らない。然し明確に判定する事は極めて困難であるから、こゝには徒に憶測を述べることを控へよう。

慶長頃にdはg、或はb、等の前にある母音が幾分か鼻音化するのが一般の傾向であつた。例へば助動詞「ぢや」は單に「ぢや」のみであれば、「女ぢや者」(三〇頁)の如き場合にも先行母音は鼻音化しない。只「おぢやる」「おぢやつた、て」の場合には「お」が鼻音化したやうである。懺悔録には誤植かと思はれる一例を除いて、すべて鼻音符が施してある。ロドリゲスは、かゝる場合の鼻音を明瞭な鼻音でなく半鼻音ともいふべきものであるとし、南蠻人がそれを獨立の鼻音に強めて、科をトンガ、長崎をナンガサキと發音するのは正しくないと言つてゐる(長崎版日本文典一七二丁裏)、コリヤードも亦Nと觀てよいが、さほど強い音でなく敏速に發音せられ柔かい音であるとしてゐる(拉文日本文典四頁)。然し獨立の鼻音と區別し難い場合もあつたのである。

惡癖にとんぢやくしてゐる所で(六頁)

色體(肉體)の見苦しいものにとんぢやくしてゐた所で(六番の御掟に就いて、四二頁)

右文中の「とんぢやく」は *tonjyak* と寫されてゐる。「おぢやる」等の「お」の鼻音化を寫すのと同じ記法である。彼と

此と同一な發音と考へられたのであらう。亦當時の發音そのものが甚だしく類似してゐたのもであらう。その鼻音記號を長音記號と誤つて、吉野博士松崎氏は鬮雀を宛てられ、姉崎博士亦これに従はれたけれども、鬮雀は「どうぢやく」又は「とうしゃく」であつて（日葡辭書）、「ぢや」(g)と「じゃ」(g)との發音上の區別をも無視せられたものである。長沼教授も前の例を「とぢやく」とし、後の例をば「頓着カ」と傍註して「とじやく」と書いてゐられる。かゝる「ぢや」と「じゃ」との混同は翻字本に往々見受けられるが、本よりその時代には一般に識別せられてゐたのである。「とんぢやく」は新村先生が貧著を宛てられたのが當つてゐる。舊版南蠻記で「とんぢよく」と傍訓が施してゐるのは誤植に過ぎなからう。

コリヤードはこの種の鼻音化した母音の上には綿密に記號を加へてゐるが、又當然鼻音化すべき場合に全く記號の加へてない所も少くない。その頃 g の前の母音を鼻音化させないのは備前地方の特徴であつた（ロドリゲス長崎版日本文典一七〇下裏）。さればとて、懺悔録に g の前の母音を鼻音化の記號が施してないのは即ち鼻音化しなかつた場合を寫したものとし、それを以て直ちに備前方言と見るのも早計である。

かゝる鼻音と共にアクセントをも一々表記した者はコリヤードの外に例なく、我々は大いに珍重すべきである。殊に九州の地以外は知らなかつたらしいコリヤードの書き残したアクセントには可成り九州地方のものが含まれてゐるのではないかと考へられる。然し我々はそれと比較考定すべき他の材料を殆ど持つてゐない。その上にアクセントの記號は誤植が最も多く、辭書は彼の自筆稿本に據り得るが、懺悔録に至つては版本のみなので、安神して利用出来ないのを遺憾とする。

下二段活用動詞に接續する推量の助動詞に「う」の外に「よう」が出来たのは近世の事である。懺悔録では一般に「う」が用ゐてある。然るに姉崎博士の翻字本には次の如き例が見える。

析檻加へやうすなんど誓文たてまらする（切支丹迫害史中の人物事蹟五六二頁）、原本二四頁

宿に止めやうとせらるゝに就いて（五六五頁、三〇頁）

原本には *cutateōzu, tomēd* とあるから、やはり「加へうす」「止めう」と書かれるべきものである。又

時々も若輩者と寄り合うて、宿老（傍訓）ろうは「らう」の誤り、貧人、不足なる者を罵詈訛謗 *fito* とあるも辭書

には *fito* が及び「ひはう」となつてゐるし、それに敬ひ加へやうする慈悲の代りに、たゞそしりあざけりばかりかけまらした。（五六六頁、三〇頁）

この例の「加へやうする」は *cutateōzuru* となつてゐて他と同じくない。字音の開音の場合であるが、仕様が *xi:oi* ともあり（六二二頁）、*xi:oi* とも寫してある（三三二頁）。これを其の儘に解するならば、シヤオと共にシーヨーオの發音もあつたのを寫し別けたのであるとも考へられる。かゝる例から推して、合音に於てもクワヨー「加へう」からクワエヨー（加へよう）が發生しかけてゐたのを特に注意して書き留めたのであると言へるかも知れない。「よう」に就いてはロドリゲスもコリヤードもその文典で全く觸れて居らず、よしや發生してゐても新しいものであつたであらう。（狂言記其の他徳川時代の書寫に係る狂言本の用例によつて、この新語形の發生を室町時代に溯らせるのは如何かと思ふ）。さうして關東に早くあらはれたかと思はれる。近畿以西の事は明かにし得ないが、關東人の告白が收録せられてゐるかどうか甚しい疑問であるから、寧ろあの綴は單なる誤記誤植であつて、「お」を *oi* や *yo* と寫す

のが普通であつたから、意味なく *u* を添へたのであると見る方が事實に近いのではなからうか。

「六番の御掟に就いて」の外聞を憚る告白の中に、

今申しあらはせうする事は御免ごめんなされうす。憚りながらこんひさんの中ぢや所で(中であるから)申しまらする。

(四四頁)

とある。「あらはせうする」は *aravaxozuru* となつてゐる。「せう」は大抵 *so* と書いてあるが、*e* を挿入しない場合もある。*e* を加へるのは實際の發音よりも國語假名遣に拘泥した綴字である。コリヤードもその文典西文寫本では「あはせう」「まらせう」「教へう」を *auaxó*, *maraxó*, *voxixó* と寫してゐる(三四頁)。拉文版本では第一の例を缺き、第三の例を *voxio* と寫してゐる(二〇頁)。何れにしても *e* の發音が行はれたわけではない。「あらはす」の懺悔録に用ゐられてゐる活用形を調べると、

連用形 あらはしまらする(一六、五二頁)

申しあらはいた(五八頁)

あらはしあつた(五八頁)

終止形 申しあらはすに(二八頁)

連體形 申しあらはす所に(一六頁)

右の如く四段活用であつて、コリヤードの文典では第二種活用に屬し、従つてその未來形は「あらはさう(ず)」となるべきである。(寫本五八頁、版本二九頁)。「せう(ず)」となるのは第一種活用の動詞である。(寫本三四頁、版本二

〇頁。故に「あらはす」が「あらはせうする」となつてゐるのは、第一種活用への類推違ひと解せられる。恐く、當時盛に行はれた謙讓助動詞の「まらする」が「まらせうす」となるのに類推したのであらう。たゞそれが個人的か地方的かといふ點に至るとわからない。

因に「まらする」は當時佐行變格活用であつた。懺悔録中の用例もすべてそれに外れてゐない。新村先生の吉利支丹文學斷片(南蠻更紗所收)の中に、

大友様の御内心を語らせられたで、なほ明かに思出しまらせた。(豊後物語)

一切舟が延びぬやうに思ひまらせた(加津佐物語)

と出てゐるのによつて、春日政治教授は九州地方に本來の下二段活用が残つてゐた例證とせられた(國語史上の一劃期)。然しこれらも、その出所たるロドリゲスの文典を見ると、「思出しまらした」(maraxia 一五三丁裏)「思ひまらせぬ」(maraxenu 一二二丁裏)となつてゐる。南蠻文學中特に九州方言を傳へた資料として甚だ珍重せられたのであるが、實は全くその資格を持たないものである。

以上述べて來たやうに懺悔録から拾ひ出される九州方言は、ロドリゲスの文典(主として一九丁裏―一七〇丁裏)に説いてあるやうな顯著なものとは殆ど無く、極めて僅少な片鱗に過ぎない。かくて懺悔録に九州方言が多いといふのも、亦反對に全く無いと言ふのも共に言ひ過ぎであるといふ結論に達するであらう。

(昭和六年十二月二十四日稿)